

## 特別対談：半世紀を振り返って ― 瀬田信哉氏、櫻井正昭氏と当時を語る

環境庁が誕生して省になるまでの間、自然保護局の幹部として自然環境行政の発展に寄与された瀬田信哉さんからヒアリングを行った。瀬田さんから「記憶がかなり曖昧になっているが、当時一緒に仕事をした櫻井正昭さんと話せば思い出せることもあるだろう」という話をいただき、櫻井さんと当時の出来事を語り合ってもらった。自然環境行政五十年史の締めくくりに、その対談記録を掲載する。

○と き：2021年11月29日（月）

○聞き手：鳥居敏男

### 1. 厚生省よサヨウナラ ― 厚生省から環境庁へ

【鳥居】瀬田さんと櫻井さんは、役所には何年くらいお勤めになりましたか？採用された当時はどうでしたか？

【瀬田】私はちょっと変則的で、1961年の秋に試験に受かって12月に厚生省に採用となり、1992年に退官するまで31年ほど勤めたことになるね。

【櫻井】僕は1965年にレンジャー専門の試験を受けて採用され、1995年に退官した。当時は50歳を超えるとそろそろ退官という時代だった。

1953年からレンジャーが賃金職員として採用され、1957年からは採用されれば常勤職員となり、上級職に準ずるとされていた。

厚生省の中でもレンジャーグループというのは、全く異質に扱われて重用されなかった。一方で国立公園を管理しているので権限だけは大きく、厚生省は手放したくない。内務省から続いてきた権限だ。だからといってレンジャー集団を重用したくもない。そのため非常に中途半端に扱われていた。

1964年に国立公園部は局に格上げになり、1965年組からはレンジャーも国立公園局採用となった。ところがたった5年くらいで政府の方針で1省1局削減となったら、また国立公園部に格下げになった。

【鳥居】瀬田さんの著作「再生する国立公園」では、環境庁発足時、国立公園行政を所管していた厚生省に残るか否かの動きについて、特に重きを置いて執筆されています。当時阿蘇国立公園管理事務所の中島良吾所長（1954年入省）が中心になって、現場のレンジャーに檄を飛ばし、厚生省と袂を分かとうとしたことが書かれており、当時の手紙のやりとりなどが克明に記されています。厚生省から環境庁に移る際の一番の思い出は何でしょうか？

【櫻井】環境庁発足の議論があったころ、当時瀬田さんは総理府にいて、僕は国立公園部管理課にいた。瀬田さんが、先輩の阿蘇の中島所長に手紙を書いて、環境庁の発足に際して公害だけでなく、自然保護も一緒に移ろう、国立公園が自然保護の中核になろうと言って呼びかけ、レンジャーは反乱を起こしたんだ。全国で密かに、当時の厚生省の幹部にわからないように反乱を起こした。

あの国立公園レンジャーのゲリラ的な運動がなければ、国立公園部が厚生省に残っていたかもしれない。あの当時、レンジャー組のトップの計画課長は、厚生省で世話になったとの思い入れがあるため、自分から進んで環境庁に出ていくことはできないと言っていた。それで計画課長は、阿蘇の中島所長に対して軽挙妄動だと言って怒っていた。

瀬田さんは総理府にいて情報を得ては各地のレンジャーに流し、僕は国立公園部の内部から情報を流していた。

【瀬田】要するにね、自分がこうと思ったことをとにかくぶつけてみるんだ。そうすればそれをサポートしてくれる人が見えてくるわけ。思いを同じくするレンジャーが全国各地にいてくれて本当によかったと思う。

【櫻井】環境庁に移ろうというときに、全国のレンジャーは純粋だった。本当に自然保護をやるんだったら、厚生省の国立公園部に残っていたらダメだ、と思い詰めていたんだよ。一方で言葉は悪いが、厚生省で安穩としていた人は、環境庁に行ってもどうせまた同じ目にあうと思っていたんだ。

【瀬田】我々は人数が少ないし、外から見れば弱々しいけれども、どうもそれは違うよと思ってくれる人も現れて、応援しましょうという感じが出てきた。

【櫻井】厚生省採用のレンジャーの仲間で、県庁に出向して給料は県からもらうが、仕事は国立公園レンジャーという委託技師の制度があった。一方で県に出向し、純粋に県の観光課職員として仕事をしている人もいた。観光課職員になっていた人は立場上反旗を翻すのが難しかったが、委託技師のレンジャーは県の監督下になかったので反旗を翻したってどうってことはない。国会議員の事務所や国会議員の秘書にも電話した。全国一斉蜂起だった。当時瀬田さんが中島所長に出した手紙が名文なんだよ。「再生する国立公園」に載っているが、今読んでも素晴らしい。なぜ今厚生省を出て行かなければならぬかがきちっと書いてある。本当に自然保護を行うなら出て行かなければならないのだと訴えている。そして時期を同じくして阿蘇からも全国のレンジャーに檄を飛ばした。

【鳥居】当時は SNS なんてない時代ですから、大変だったでしょうね。

【瀬田】とにかくみんな必死だった。無茶な、と思えることを実行する人物はいつの時代

にもいるのだ。当時の中島所長がそのような人物だった。

【櫻井】それまでの国立公園行政は、美しい自然を護ろうなんて言っても実行していなかった。特に厚生省の後半は酷かった。なぜなら観光開発が盛んで車社会になったから、あちこちで観光道路の要望があがった。陳情が来たら受け入れてしまい、公園事業と称して OK を出してしまおう。高山帯、亜高山帯だろうが審議会でも承認してしまった。典型的だったのは観光道路である塩那スカイライン（塩原～那須）で、山の斜面に幾重にもわたるつづら折りの道路を造成したら、縄のれんのような土砂崩れになった。それらが引き金で自然保護運動が全国で起きた。

厚生省と林野庁との関係も杜撰だった。スーパー林道は自然公園法の手続きがほとんど要らなかった。林野庁が赤鉛筆で図面にルート線の線を引いたもので自然公園法の協議を済ませられる状態だった。国有林の経営計画に載っていれば、厚生省は文句を言いませんという約束だった。特保、1 特以外の国立公園では奥地天然林の伐採が進んだ。

## 2. 市民感覚を取り込む — 身近な生き物調査、審議会委員

【鳥居】瀬田さんは公私を問わず割と好きなことをいろいろ進められましたよね。何か思い出に残っていることはありますか？

【瀬田】いろいろなことに挑戦したけど、重要なのは一緒にやってくれる優秀な人がいるかどうかということ。そんな人がいればどんどん進めればいいと思う。そういう人がいると不思議と色んな人が集まって来て、ああでもない、こうでもないと思恵を出してくれる。進めていく中で私を知っている人から、「瀬田さんがやっているなら大丈夫だよ」と言ってもらえる。そんな関係ができればうれしいし、面白いね。

【櫻井】瀬田さんは、色んな新しいアイデアを出された。普通の官僚では思いつかないようなことを企画していく。身近な生きもの調査だって、緑の国勢調査（自然環境保全基礎調査）に普通の人の参加を促した。それまで、生物や生態学の学者たちが集まってやっていたものを、それだけでは面白くないと、一般の人たちに参加してもらった。反響がものすごく大きく、国民の参加が進んだんだ。ただ反響があると批判もあった。素人による調査だったので、学者からはそんなデータは信用できるのかということになった。とても面白いのに、科学的でないという評価をする人もいた。しかし、国民の関心を身近な自然や環境に向けさせたのが、一つの実績となって評価された。

このことに触発され、国民参加ということで水局が名水百選を始めたり、大気局のかわり風景や音風景の百選などにつながった。新しい企画をするときにトップが止めようとすることもあるが、瀬田さんが企画するとやらせようということになる。身近な生きもの調査では予算を確保して専用の電話回線を増やした。瀬田さんの企画は迫力があつた。

【瀬田】あの頃はよかったね。櫻井さんのようなサポートする人もいてくれた。いろんな人がいて、ぶつかることもあったが、企画が進むと文句も言われなくなり、やってみようという流れになった。

【櫻井】審議会の委員に庶民感覚を持った有名人を入れ始めたのも瀬田さん。審議会委員は学者ばかりではダメだ。庶民感覚を持った有名人を入れるべきだとして始めた。失敗した例もあって、あつという間に辞めてしまった人もいた。

環境省も最近は女優さんに「なんとか大使」をお願いしたりしているが、瀬田さんが審議会に来てもらうようにしたのが始まりではないかな。八千草薫さんを審議会に入れたのも瀬田さん。それまでは審議会は学者中心であり、素人を入れることを上司が認めなかった。

### 3. 人脈を活かしてチャンスをとらえる

#### — 世界遺産条約、公共事業化、部門間配置転換

【櫻井】瀬田さんが広報室長になったときは、新聞記者とも仲良くなった。瀬田さんは新聞記者の上をいくアイデアを出すため、記者も寄ってくる。記事向けの情報を出すので記者側も喜ぶ。そうやって関係を築いていった。

原文兵衛さんが環境庁長官に就任した時（1981年）に志布志湾の問題が起きた。環境庁が志布志湾の石油備蓄基地埋立にゴーサインを出した。（1982年志布志湾の反対運動があり、野党が国会で追及した。）原さんのイメージが悪化したが、本当の人柄は印象が悪い人ではなかった。いいイメージアップのテーマを持っていけば、当然マスコミから良い評価がされる人だった。瀬田さんは原さんを知床100平方メートル運動の現地に行ってもらったりして導き、結果イメージアップとなった。その後広報室長から異動した後も、瀬田さんは原さんを囲む会の幹事を任されるようにもなった。当時の新聞記者たちもその後ずっと集まるような関係ができた。

愛知和男さんが環境庁長官になる（1990年）と、竹下派だった愛知さんとも親しくなった。屋久島が世界自然遺産になる前、鹿児島県が屋久島環境文化村構想の策定を進めていた当時、担当課長として環境庁から出向していた小野寺浩さんが、環境文化村構想の懇談会にレンジャーOBで当時国立公園協会理事長の大井道夫さん、国際日本文化研究センター所長で哲学者の梅原猛さんらに入ってもらい屋久島を自然遺産にするという空気をつくっていた。瀬田さんもそのメンバーで、梅原さんを焚きつけて、愛知さんを通じて竹下登さんと梅原さんとの料亭での対談が組まれた。その時点では愛知さんは長官ではなかったが、その対談に愛知さんも同席して、傍に瀬田さんがいた。竹下さんはそれまで環境に対して積極的なイメージではなかったが、梅原さんがこれからは環境の時代だと説いた。ちょうどブラジルの地球サミットも目前に近づいていた。

それまで外務省は世界遺産条約について動いてくれなかった。先の対談を契機に竹下

さんに話をしたことで、竹下さんが、俺が世界遺産の話をしてやる、ということで進展した。当時外務事務次官が皇后陛下の父の小和田恆さんで、一気に話が進んだ。長い間環境庁がいくら言っても外務省に相手にしてもらえなかった。文化庁の文化財も相手にしてもらえていなかった。世界遺産条約を締結した途端、文化庁はいろいろなアイデアを出すようになり、今では20件の世界文化遺産が登録されている。それに比べて世界自然遺産は腰がひけている。もっと打って出れば良いところもある。

世界自然遺産は林野庁と一緒に進めなければならず、環境庁だけで動いても進まない。やっと動いたという時に、屋久島は当然として、林野庁が春秋林道をやめたことをアピールするため、白神山地についても東アジア最大の原生的なブナ林という理由で登録申請することとなった。それまでは自然環境保全地域として、他の地域は数千ヘクタールしか指定されなかったのに、白神山地は一気に1万ヘクタール以上も指定することになり登録に至った。

【瀬田】色々進めていると外から危ないよと言われることもあるが、櫻井さんのようにしっかりとまとめてくれる人がいたので、安心して事にあたることができた。はやり物事を進めるときには、そういう人が必要だね。

【櫻井】瀬田さんが道を広げてくれるから、続いていける。世界遺産については、白神山地が登録されたので、当時知床斜里町長の午来昌さんが、こちらの方がはるかに自然が豊かだと動き、知床半島の世界自然遺産登録が進むことになった。知床半島は、森林だけではなく、流氷もあり、ヒグマやオジロワシもいるなど、動物も植物も豊富だった。白神山地の登録に触発され、後の登録に至った。

【櫻井】国立・国定公園施設整備事業の公共事業化も瀬田さんのおかげだった。以前から国立・国定公園における施設整備については、予算がほとんどつかなかった。毎年のように前年並みか、マイナスになる年すらあった。公共事業化は国立公園行政にとって長年の悲願であった。

内需拡大で生活関連枠の予算を広げるというタイミングで予算拡大を行った。アメリカからの強い内需拡大要求のプレッシャーがかかった。その際に、全国のトイレをきれいにするという方策を瀬田さんが言い出した。(公衆トイレ緊急再整備(自然公園リフレッシュトイレ作戦)1991年)

それから予算がつき始めた。当時の国立公園のトイレは酷かった。山の中でボットンだったし、どこに行っても汚かった。掃除する体制もとられていなかった。自然公園美化管理財団(現自然公園財団)もまだ活動が不十分だった。

自民党の中に、自然公園の施設整備の小委員会をつくってもらった。近藤元次さん、柳澤伯夫さんらにリーダーになってもらい、それにより施設整備の予算が前年比125%と伸びるようになった。

国立公園の施設整備費が同じペースで連続で増えていき、細川政権（1993年8月～翌年4月）の時に公共事業化された。当時の政権が公共事業にこれまでと違う色をつけろ、2つくらい枠を増やせと大蔵省に注文を付けて、航路標識の整備と共に自然公園の整備が公共事業の仲間入りをした。

【鳥居】 そういう予算面だけでなく、現場組織の強化にも関わられたとお聞きしていますが、具体的にはどういうことだったのでしょうか。

【櫻井】 林野庁との間で部門間配置転換が始まったのも瀬田さんの時代だった。林野庁の幹部とも気脈を通じて、1991年に林野庁との間で大々的に部門間配置転換制度を活用することで合意した。いずれ定年を迎えれば、後任をプロパーで埋めることができるということで、なるべく定年間近の人（55歳くらいが目安）を受け入れた。11人受け入れれば10ポストが得られるということだった。職員を増やしたい環境庁、赤字の特別会計を抱えて職員を減らしたい林野庁、行政改革を進めるという観点でも、配置換えした上で国家公務員の数を減らせることから三方よしだった。当初は、レンジャー業務に慣れていない者が事務所に配属され、現場に混乱をきたしたこともあったが、長い目で見ればレンジャーの大幅な定員増につながった。部門間配置転換という制度を政府が企画し、それを活用するため林野庁と交渉したのが瀬田さんの時だった。

【鳥居】 激動の時代の舞台裏の話をとくさんお聞きすることができて、とても興味深かったです。最後にお二人から後輩たちへのメッセージをお願いします。

【瀬田】 国立公園の保護と利用というのは、現地のレンジャーがその地域に住む人や関わる人と親しくなるなかで取組の輪を広げていくもの。環境庁だ、林野庁だ、という場面があるかもしれないが、そうではない普通の人たちをどれだけ活動の輪に引っ張り込めるかにかかってくる。自分の独善的な考えだけで進めようとしてもダメ。関心のある人たちの思いを聴きながら進める姿勢を大切にしてほしい。

【櫻井】 仕事をする上では、何のためにこの仕事を選んだのかということ問い続けて欲しい。僕自身は現場経験が少ないので偉そうなことは言えないが、役人として「どういうポストに異動するのか」に執着するのではなく、赴任先の現地の自然に惚れ込んで、なるべく山・川を歩いて自分のものにしていく、そういうチャンスを与えられたという気持ちが大事だと思う。アセスメントなどの評価をする場合でも、必ず自分の目で現場を確認して欲しい。国立公園行政とは、自然保護一本やりではなく、国民に自然とどのように親しんでもらうか、保護と利用とのバランスを考えるという高度で知的な行政であることを忘れないでほしい。

【鳥居】 本日はどうもありがとうございました。



写真. 対談風景

.....

【参考文献】

- 「再生する国立公園」2009年 瀬田信哉著 アサヒビール株式会社発行 株式会社清水弘文堂書房編集発売
- 「レンジャーの先駆者たち」2003年 財団法人 自然公園財団 編集・発行

【略歴】瀬田信哉

1938年大阪市生まれ。北海道大学卒業後、1961年に厚生省国立公園部に入省。国立公園レンジャーとして川湯、上高地などに駐在。その後長崎県課長を経て、環境庁官房広報室長、自然保護局及び企画調整局課長などを歴任し、1992年長官官房審議官を最後に退官。退職後、自然公園美化管理財団専務理事を経て国立公園協会理事長を2006年まで務める。

【略歴】櫻井正昭

1943年東京生まれ。1965年厚生省採用、陸中海岸宮古駐在、厚生省国立公園局から部を経て1971年環境庁自然保護局に出向。大気保全局、水質保全局瀬戸内海環境保全室長、企画調整局環境影響審査課長を経て、自然保護局計画課長、企画調整課長、長官官房審議官を最後に1995年退官。その後日本環境協会、自然公園財団の各専務理事。2012年退任。